

# 浅草喜劇人銘々伝

9

西条 昇

江戸川大学教授・喜劇史研究家

## 第二次「カジノ・フォーリー」篇②

昭和5年の初春から突如、第二次「カジノ・フォーリー」が物凄い人気を集め始めた要因は大きく分けて二つあった。一つは前年の12月12日から東京朝日新聞で始まった川端康成の連載小説『浅草紅団』でカジノが取り上げられたことであり、もう一つが「ズロース事件」である。

「カジノの踊り子は金曜日にズロースを落とす」

そんな噂が口コミで広まり、報知新聞の社会面でも紹介されたのだ。とは言え、これは踊り子の生足に客席から熱い視線を送っていた観客の願望や妄想が生んだ噂に過ぎなかったが、カジノにエロを期待して足を運ぶ人が増えたことも確かであった。そうした噂はやがて警察にも伝わり、6月30日からの第24回公演におけるサトウハチロー原作のレビュー『センチメンタル・キッス』上演中に踊り子と座長格の榎本健一が象潟警察に連行されてしまう。踊り子は

したスピーディーな舞台進行を取り入れ、エノケンの個性を活かす脚本を書いた。サトウハチローは『カジノ・フォーリー裸史』に「山田、水守などはなかなかすばらしい」と記している。山田は『嫁取合戦』『久米仙おちる』などの当たり狂言に加え、のちに『浅草三大コント』の一つに数えられた『レストラン殺人事件』の作者でもある。

7月10日からの第25回公演では、川端の『浅草紅団』が島村の脚色によりレビュー化された。カジノの舞台や客席の場面のある作品を実際にカジノの場内で観るのは、さぞかし楽しく面白かったに違いない。

当初は榎本、中村是好、間野玉三郎、堀井英一の給料は四人平等に80円（大学出たての人の給料が15〜20円の時代）であったが、大入りが続く中で給料を上げてもらいたいの声が出た。中村は脚本料、間野と堀井は振付料が別に30円ほどあったが、榎本は演出をしても演出料は入らない。人気と面白さではエノケンが三人を大きく引き離していたにも関わらずである。榎本が代表して経営者と話し合い、三人の給料は100円、榎本が120円になった。それから間もなく更に賃上げの声が上がると、「ならば、い

全員が物差しでズロースの長さを測られ、エノケンは始末書を取られた。11月24日には警視庁保安部より「ズロースは股下三寸未満のもの、及び肉色のものはこれを禁止する」という通達が各レビュー団に出されている。

踊り子では人気トップの梅園龍子と花島喜世子のほか、昭和5年に入って日本舞踊の松木みどり一座にいた山路照子と三條綾子の姉妹と、その従妹の望月優子（当時は美恵子）が加入し、一層、華やかになった。愛称が「オベチヨコ」の山路のちに文芸部の島村龍三（黒田儀三郎）と結婚し、その娘はハナ肇の夫人となる。三條は一時期、高見順と噂され、望月は戦後に松竹で『母物映画女優』として活躍した。

文芸部には東洋大出身で『白山文学』の同人だった島村のほか、早大出身で武田麟太郎門下だった水守三郎、岡田嘉子一座にいた山田寿夫らが参加した。彼らは自分たちの作るレビューを自嘲して「インチキ・レビュー」と呼びつつも、割どん（中央から割れる形式の緞帳）と暗転を多用

つそのこと六区の方に進出しようじゃないか」との榎本の提案に三人も賛同したので、榎本は木内興行部に話をつけ、榎本が500円、三人が300円で昭和5年8月から観音劇場での「新カジノ・フォーリー」の旗揚げを決めた。しかし、三人は水族館側の引き留めに籠絡されて残留したいと言いつつ、純情で一本気のエノケンは居合わせた堀井を怒鳴り散らし、結局、三人は合流を決める。一方で、文芸部員は賃上げ要求の言い出しっぺである島村をはじめ誰もついていかず、踊り子も榎本夫人である花島以外の人気者は皆、カジノに残っている。

※34ページの写真も併せてお楽しみ下さい。



第二次カジノの舞台『珍カルメン』より。エスカミリオ役の堀井英一（右）とカルメン役のエノケン（左）。堀井は米国喜劇俳優ベン・ターピンのメーキャップをしている。

# 西条昇の浅草喜劇コレクション 第二次「カジノ・フォーリー」篇②

西条昇の所蔵資料の一部を本文ページ（P12-13）と併せてお楽しみ下さい。



昭和5年5月10日からの第二次カジノ第19回公演プログラム。レビュー「三銃士」ではダルタニアンをエノケン、三銃士を中村、間野、堀井が演じた。



昭和5年5月20日からの第二次カジノ第20回プログラム。山田寿夫・作のレビュー「三脚の上の馬鹿」でエノケンが「撞球の馬鹿」役で笑わせた。



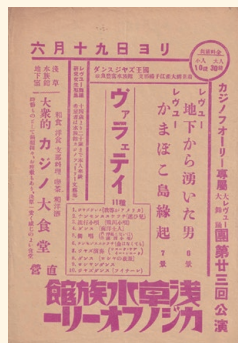
昭和5年6月30日からの第二次カジノ第24回プログラム。レビュー「センチメンタル・キッス」が上演中止されて踊り子が警察でズロースの長さを測られた。



昭和5年7月10日からの第二次カジノ第25回プログラム。カジノの場面が出てくる川端康成の小説「浅草紅団」をレビュー化して上演した。



昭和5年7月21日からの第二次カジノ第26回プログラム。この公演を最後にエノケン第二次カジノの舞台を去っている。



昭和5年6月19日からの第二次カジノ第23回公演チラシ。浅草水族館の地下には直営の大衆的カジノ大食堂があった。

**西条昇** 江戸川大学教授、喜劇史研究者。

昭和39年、東京・飯田橋生まれ。幼少期より浅草をはじめとする都内の劇場や寄席で喜劇と演芸を観て育つ。新聞・雑誌への連載やTV・ラジオ出演も多数。主な著書に『ニッポンの爆笑王100』『笑伝・三波伸介』など。

